

# 汲古一紙

## 『牧野富太郎先生の話』(二)

中村素堂

実は東大の先生でもあられる先生、理学博士として植物学では世界的存在といわれる先生が、どうしてこんなに貧しいのか不思議でならなかった。これはまだ私が学会の事情にあまりに疎かったせいで、天下に知らぬもののない学閥の圧迫による大きい犠牲のおひとりであられることは後でよく知った。

当時の東大総長山川健次郎博士は、牧野先生のために常にもうかりそうな内職原稿や講演の口などの斡旋に骨を折られたとのことであるが、理学部の教授たちは見て見ぬふりで、ろくに話もしない冷たさであったという。

しかし時はめぐって牧野先生の『植物分類学辞典』は、着々出版の運びとなり、その世界的声価がいよいよ高くなりだすと、先生の八十何年の齢は危くなり出した。

新聞はこのことをあげて大きく報じ、論説の集大成・完成と引き換えに先生の命の火は静かに大泉のお宅で消えていった。日本学士院は臨時会議をもって決定し、ご臨終の枕頭には文化勲章を飾ることができ、またその著書は天皇陛下からも、「こんなに重宝している辞書は少ない、そしてまたはなはだ判りやすいのも珍しい」というご感想を洩らされたと承っている。

先生の死後、その植物栽培場は東京都に買い上げられ、一生涯その父君博士の助手として学問から衣食の果てまでご面倒を見られたお二人のお嬢さまはみな、この買収や標本積渡の代償で、静かに未婚のご生涯を閉じられたと伝聞している。

そして気がついてみると、百神井銀座にあったマキノ写真店はいつか消えて他の店となっていた。後で判ったことだが、この写真店主こそは牧野先生のご長男であり、その標本撮影のスタッフであったのではなからうか。

政界に政治派閥、財界に財閥、学会に学閥、何といういまわしいことであろう。

しかし牧野先生の学的本志を貫く精神の熾烈さと、これを助けるご一家のすざましい活躍も十分拝察されるが、眼のあたりに見たこのご一家の清貧そのもののお姿は、われわれが人生をかけての仕事だなどといっているような甘いものではなかった。同時に同僚の足を引っぱる根性の醜さに怒りを感じ、にくまずにはいられない。まあ翻って他山の石としたい。

西武鉄道池袋線で十二、三分の大泉学園駅から歩いて少し、いま私の家の老夫婦を助けて働いてくれている家政婦の人はその近隣で、雨漏りのすこかったあのお宅も修理されて記念館になっている由である。

もちろんそのお庭一面が生きた植物標本で、次から次へと何か咲いたり、実ったりしているそうだと。

静かな学問の散歩をしながら、偉大なる一老学者を偲ぶのも有意義ではないかと思う。

『筆間雜記』中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。

〈一書範〉昭和五十七年六月

貞香軒偶成

大正丙寅十一月  
年七夕後一日

点滴無聲四壁寒  
簷前竹葉夜蕭蕭  
三更剪燭仍臨帖  
風鐸清音度碧石  
蒼